国家■覚え書　その(5)

三浦精一

宇和島の旧藩主伊達家の御曹が殺人か何かで満州に行き馬賊の頭目張宗遠となった。満州国建国の功労者として、他の頭目たちと共に将軍となった。しかし失脚して張宗遠は青島に来ていた。私は何が失脚の理由だったかは知らない。しかし彼と共に将軍となった他の頭目たちは満州国に叛旗をひるがえして討伐されたと聞いている。

それは満州国軍（実は日本軍）の整備とともに、この将軍たちを栄転させたという。栄転は日本の軍隊では単身赴任すればすむのだが、シナでも満州でも軍閥と称せられる者たちは皆自分の手兵として持っているのは自分が養っている部下で、その関係は親分と子分である。栄転命令で赴任することは、この子分と別れることであり、子分は親分を失うことで、言わば手足をバラバラにされる刑罰同様だ。だから叛乱するのだ。

張宗遠の部下たちは満州からはるばると山海関を越えて山東省までたどりついた。それを引率していた将校たちは日本人だった。今村さんはその一人だった。地名は記憶していないが、今村さんの所に日本軍の伝令が来た。今民衆に包囲されて全滅寸前だから救出してくれという。事情を聞けば兵士が強姦したとかで蜂起した民衆に包囲されたのだ。

今村さんは「あの時くらい困ったことはない。私の部下は皆シナ人だ、悪いのは日本兵だ。いくら何でもそれを助けろとは言える訳がない。思い余った私は部下に言った。皆も知っているように悪い事をしたのは日本軍だ。その軍から救出してくれと言って来ているんだがと。すると部下が日本は兄弟だ、助けましょうと言ってくれた。私は思わず涙がハラハラと流れた」と、その時のことを語った。こうして日本軍は救出された。そして一緒に青島の日本の部隊に行った。

ところが翌日、張宗遠部隊に対して、完全武装して集会せよという命令が来た。命令の如く集会すると武装解除された。路頭に放り出された部隊の者は、張宗遠部隊の者を雇傭してはならないという軍通達が出ているのを知った。今村さんたちは煮湯を飲まされた思いだった。張宗遠から私のいた華北航業総公会の会長山口退役海軍少将に話があった。山口少将は皆を引受けて総公会の一機関である輪民船運輸公会（そこに統計をつくるために

私は出張していた）に配属されて来た。終戦で引揚げるとき、今村さんも一緒の船だった。

×　　×

輪民船運輸公会（輪船は汽船、民船はジャンクのこと）に于さんという日本語のうまいのがいて、張宗遠部隊の者たちが入って来たとき、「三浦さん、あの人たちの眼が分りますか」という。分らないという私に、「ようくごらんなさい。あれは人を殺した眼ですよ。用心しなさい」といった。兵隊だったから人も殺していることは当り前のことだが、シナ人はこうして前歴は聞かなくても殺人者を見分けて警戒する。こうしてこんなことを私という日本人に話すのも、日本人の中から私を見分けていたのだった。庶民はこのようにして軍人や役人とは別の生きる世界を持っている。

×　　×

戦争ももう終りに近い頃だった。日本人の民留民団で何か余分の金が出来たとかで、その使い途を懸賞募集したことがあった。そして当選したのは、日本人の生活の安定のため、農場をつくって安価に野菜を供給するという案だった。好い案には相違ないが、どんな原価計算で当選したのだろう。農民が需要供給の市場価格で血の出るような苦しみを見ていることを知っているのだろうかと思った。案の定、出て来た野菜を買う日本人は居ない。シナ人の店の方が安いということになった。労賃、肥料代を払って、正直に計算したら、いくらシナ人の労働力を安く買ったからといっても、そう安価にはならない筈なのだ。今日本の都会地で産地直売ということが行われているが、これは市場価格が高い時だけ産地価格が安いということであることを知らねばならない。市場価格が安い時には農民は肥料代はおろか、運賃も出ないというヒドイ目にあっていることが多いのだ。だから畑で腐らせる外ないのだ。だから野菜の原価を構成するはずの肥料代、農機具の消却費、そして運賃は一体誰が払うのだ。すべて農民の借金になって行く。市場価格が高い時の利益で埋められるものではないのだ。

農民が買う肥料にも工場原価として労賃、材料費、消却費、一般管理費、それに利益が計上されている。それに中間業者の利益が加等される。石油危機の時ジェネラル石油の社長だかが千載一遇の好機とホザイタのは、この原価の何倍何十倍の値段で売る時が来たということだ。そしたらそれが化学肥料や農薬に折込まれて農産物の原価は高くならねばならない。消費者の声が高

くて市場ではそう高く取引できない。シワヨセは農民に行くのではないか。労働者も物価高にあえぐ。この資本主義の悪循環の過程で、ウマイ汁をすうのは誰だ。ウマイ汁がすい続けられるために政治献金もするのではないか。

×　　×

僕は少年時代から日本の政治家等の宣伝文句の「シナ人は厘毛を争う」という言葉をおぼえている。青島に行って生活した時、はじめて厘毛を争そうのは日本人だということを知った。シナ人は貸借についてはハッキリしている、厘毛も好加減にしない。しかし商人はそんなことはない。八百屋で月掛の約束で買っていたが、買物の計算をして半端が出ると、負けろと言えば負けてくれる、それを一ケ月合計して払う時、また半端を負けさせる。負けてくれる。その日その日の値段も決して高くない。経費が極度に切りつめられているのだ。店員は同郷の子弟を雇う、衣食すべて店主もちで、年に一度正月に帰郷する時にまとまった金を渡す、食事は店主から順次に店員も同じ皿のものを食べる。寝る時は店の空所に木の小さな台を出して寝る。こうして経費を切りつめて、商品にかける巾は日本人の店よりも少ない。だから安いし、損にさえならなければ負ける。日本人の店ではそうは行かない。負けたら損するという。損する訳でもないのに一銭一厘も引くまいとする。日本人が日本人の店に行かずにシナ人の店に行くことになる。日本から直接仕入れるもの以外は結局売れないことになる。

×　　×

私が生活したのは青島という都市なので周辺の農村についてはほとんど知らない。そしてその農村部は日本軍の言う匪賊地帯であり、日本軍はそうした主要都市に駐屯して匪賊に囲まれていた訳である。農民は農産物をもって都市に入ってくる。人を見たら泥棒と思えということわざを地で行くのはこうした権力者共やガリガリの持金者、高利貸共だろう、軍はそのために良民証を発行したが、溺れる者がわらをつかむようなもので、良民とゲリラの区別はつけられるものではない。ゲリラも良民証をもって堂々と市内に入ってくる。密偵を使う。密偵自体が二重スパイだったり、ゲリラだったりする。こうした中で日本軍に協力するということは、どういうことか。陽に協力者と見えても、実際はそうでないものが大部分のはずだ。権力、武力の横行するところ、民衆は常に引き裂かれるのだ。

日本人は孔子や孟子の儒教がシナの宗教だと思っている者が多い。しかしこれは政治道徳にすぎず、官僚が出世するためのものだ。徳川幕府が採用して、日本中に普及した。しかし日本人の中には、こうした官学に反対して同じ儒教でも王陽明学派をとった中江藤樹、大塩平八郎、陶山訥庵などもいた。

青島で日本の司令官が孔子廟を建てようと言い出したことがあった。民心を得ようとしたのだろう。一部の資本家は協力した。しかし、小さな孔子廟しかできなかった。ところがその頃壮大な道観（道教寺院）が建てられた。民衆の喜捨によるものだ。毛沢東が批孔運動をする訳も分るだろう。

× ×

華北航業総公会は日本海軍の封鎖作戦の一翼として海上からの匪賊の流入を警戒していたが、青島港の濤力その沿岸もすべて匪賊地帯だ。各地に支部をおいて航行許可旗や航船証などを出して検査したが、雲集する多数のジャンクをどうして取締まれるだろうか。ジャンクによって上海や南方の物資は続々と入ってくる。私はこの集散する物資の統計をつくらせる仕事をしていた。これが統計表として華北航業に掲載された。この華北航業には当時、職員たちの出張報告や研究が資料として出ていたが、今はなかなか得られない。五・一五事件で蜂起した海軍将校たちもここに来ていた。その一人の中村義雄（後召集されて戦死）の船行の研究も貴重なものだった。

船行というのは、ジャンクで来た船員たちが、投宿し、そこで持って来た物資を売捌いてもらい、帰りに持って行く物資を集めてもらう所だ。皆 それぞれの郷里の関係で密接に結ばれている。日本でも昔はこんな結びつきで物資の流通が行われていたと思われる。というのは僕の郷里の町厳原には数軒の魚問屋があり、ここに広島や山口や五島などから来た漁船の船主船員たちが投宿し、漁に出て漁獲をここに委托し、ここから市場に出し、漁期が終ると帰るのだった。対島は海産に恵まれていても対島人は漁師にならない。魚は海岸に釣りに行けばよく釣れた。僕の子供の時からの友人の一人の家もこの魚問屋だったが、つぶれて今は東京に来ている。ずっと前に有名だった女優の津島恵子の家も矢張り魚問屋だった。

（つづく）

★海外だより

★インターナショナルアナーキストジャーナルと銘打った『マッチ』(The Match —米国—) 紙は、一月号が巻六第一号だ。その第一頁題字わきの標語は…。

アナーキズムとは人間の作った法律に制限されない自由に基礎を置く新社会秩序の哲学であり、あらゆる政府形態は暴力に依るものであり、それ故悪で有害でまた不必要だとする理論である。

アナーキとは政府のないこと。強制力に基礎を置いた侵犯や権威を不信し、無視すること。政府の代りに自由な合意に依って規制される社会体制である。

アナーキストとはアナーキズムを信じる者。強制的政府や侵犯的権威のあらゆる形態に反対する人。即ちアナーキー、政府不在を政治的自由及び社会的調和として支持する人のことである！ と記している。まだ結論は出ていないが〈アナーキズムと私有財産〉として読者参加の討論欄を組んでいる。ポール・アヴリッチは〈ソビエトに於けるクロポトキンの伝記〉と題した一文で彼地のクロ研究の現状を語っている。

★〈ロシアのアナーキスト達〉でなじみのポールアヴリッチから連絡を受け応答すると返事と共に自著〈**バクーニンとネチャーエフ**〉〈**神と国家**〉（これはフリーダム版の再版。彼は序文を寄せている）の回送を受けた。前著はA5判大32頁の小冊子だが内容は濃い。

セルゲイ・ゲナディエヴィッチ・ネチャーエフ（Sergei Gennadievich Nechaev 1847—1882）の生涯は革命家として偶像化されると共に偽善と悪の体現と批判を受けている。ネチャーエフは農奴の息子また は看板書きを父として生まれ18歳でペテルスブルグへで て、一八六八年大学に入り、そこで学生グループの中か ら革命家への道を歩いた。当時大学生達の間での本はブ ンナロッテイ著〈バブーフの平等者の反逆〉で、これが 秘密結社と反逆の生への嗜好を植えつけた。ネチャーエ フの秘密好きは自分が逮捕されてピーターポール要塞監 獄へ送られるとして、ヴェラ・ザスリッチにメッセージ を手渡し、事実はヨーロッパへ渡るだけに過ぎなかった のでも明きらかだ。この後（一八六九～七二年）バクーニ ンと接触する。詳しくはE・H・カーの〈バクーニン伝〉、 ルネカナックの〈ネチャーエフ〉その他で判る。アヴリッ

チの焦点は一八六九年四月～八月の間に執筆された〈革命家の教理問答〉の著者は誰か、ネチャーエフかバクーニンか、また両者の合作か…の認定だ。バクーニン自身一八六六年に〈革命の教理〉を出版しているからややこしくなる。これをバクーニンの著とみるのは〈西欧ではマックス・ネトロウ、E・H・カー、フランコヴェンチュリ、ソビエトではB・P・コズミン、バクーニンの仲間でZ・K・ラリー、ミッシェルザッチン等はバクーニンの直筆をみた〉そうである。ネチャーエフの著作とするのはクロポトキンライホウス版で、ブラックパンザーはバクに帰しているそうだ。所でアヴリッチ説ではミッシェルコンフイノの研究を踏まえ、バクが〈君のカテキズム〉〈ジェスイット方式〉とネチャーエフを非難した手紙を引用してこれによってカテキズムは今やネチャーエフに帰せられる。けれどバクーニンがその作成や改訂に一役果さなかったとは保障できない。というのは二人の男達が共働していた時期に書かれたものであり、例え執筆の責任はネチャーエフだとしてもバクーニンは執筆と編集を助けただろうからだ。事実、文中にはバクの用語がみえるしバク執筆原稿に擬せられたものも存在するから…」つまり消極的にしろバクはカテキズムの存在を知悉していたと認定する。

ところでその後のネチャーエフの足取りはイヴノフ殺し（ドストエフスキーの『悪霊』参照）で再びヨーロッパに通れ、この時期にはヘルツェン、バクーニン、オガレフ をカテキズムにある通り〈彼等を把えて離さず、その秘密を握ること。そして極端まで彼等を追いこみ遁げ路がないようにすること〉を実行し、その結果は、資本論を訳し損ったバクはマルクスのため、インターナショナルを追放される。ネチャーエフ主義とは虚偽によって民衆の新らしい搾取者を準備し、〈人間の公正の感覚を麻痺させ〉〈民衆に嘘をつくこと、仲間に疑惑をかけスパイすることそして排除することを教育する〉

ネチャーエフは一八七二年八月四日アドルフ・ステンコフスキーに売られて逮捕され、刑事犯の普通殺人者として要塞監獄に送られた。その英雄的な革命家としての生き方はカミュの『反抗的人間』に描かれている。

一八七二年十一月二日付でバクーニンはオガレフに手紙を書きネチャーエフの運命をかこっている。バクーニンの秀れた洞察と革命に恋した感動的な手紙である。「ぼくは彼（ネチャーエフの事）に深く同情する。他の誰だってあの男程にぼくを意図的に傷つけた者はいない。

けれど同情するのです。彼は世にも稀な精力的な人で、ぼくと逢った時は彼の眼の中にわが哀れな抑圧された民衆に対する熱烈で純粋な炎が燃えていた。わが民衆の歴史的そして現実的な国民的不幸は彼を本当に苦しめていたのです。その頃の彼は外面をつくろわず、けれど内面は汚れていなかった。彼の権威主義と強固な意志が、残念なことに彼のマキャベリズムとジェスイット派の方法論による彼の無知とが、結局彼を救いようのない汚れに陥し込んだのです。…けれどぼくの内なる声が語る。ネチャーエフは永遠に消えた。確かに彼を失ったのだ。だがネチャーエフは自己の深みから、汚濁にまみれていても凡庸ではない自己の基底からその原始的精力と勇気を呼びだすでしょう。彼は英雄のように死ぬだろうが、今度は誰も裏切っていない。これがぼくの信念です。ぼくの言葉が正しいかどうか待ってみましょう。」

カテキズムは一九六九年ブラックパンザーでパンフになり指導者のエルドリッチ・クレーバの聖典だったという。アヴリッチは次のように記している。

「シンバイオニズム解放軍はオークランドの視学官とメンバーを殺した。理由は彼等が〈暴力に奉仕し、秘密指令を重視する（エゴイスチックな）指導権に反対して組織から離れたからだ。イヴァノフ殺しは、奇怪なことに、一九六九年ニューヘブンで、ブラックパンザーが疑わしい通報者として仲間殺しをやったこと、一九七二年の日本で、連合赤軍のリーダーが〈革命的訓練〉に違反したとして、14名のグループメンバーを殺害したことに現代的な符合をあわせている。」

★野　火★

★偶像化を警戒せよ　　ハ　ギ　シ　ン

三月十四日、大逆事件の真実を明らかにする会主催の、坂本清馬氏追悼会が雑誌会館でひらかれた。六〇人位参加し有意義であった。私は彼を敬し同情もしていたので、近著『墓標なき革命家』のはじめにも、彼との会見記をのせておいた。それには書かなかったが、彼は数頭の野良犬を飼っていた。人なつこい犬達で、私の足に頭をすりつけたり、掌をなめたりして離れなかった。記録映画を見てその時を思い出し、胸がつまる思いがした。

ただ、会に出て感じたことは、彼を余りに英雄視し大思想家、大革命家のように讃えすぎてはいないかという恐れである。堺利彦が秋田監獄に見舞った時、坂本氏は泪を流して「自分の例にこりて、みんなは物騒な行為はしないでくれ」と語ったこと。大杉栄が見舞った時も、赤ら顔で闘志満々の姿を予想していたら、看守には最敬礼し、しょげきった様

子なのを見て大杉は泪を催したということ。こうした人間的反面というか、弱い面も見のがしてはならないと思うのである。彼を悪くいう気は毛頭ない。然しやたらに持上げすぎることは故人にとっても歴史のためにも、決していいことではない。

★『同時代人』誌の紹介

リベルテールは東京地方で発行されている。最初、編集に携さわった時、恥しいけれどもかっこうのいい事ばかりを考えていた。今もしょっちゅうへんな事を考えている。でも、少しどうかな、と思うことだけれど、そのへんな事を書いてみる。

リベルテールは東京地方から他の地方へと送られている。地域に密着し、地域の声となりたいのだが実際は地域より遊離し、自己満足的に発行されている現状だ。そのことも念頭に置いて、思う。地域の人がそれぞれ、自分のできる範囲で機関紙なりリーフレットをだす。それが他の地方の人々とかってに連絡し合い、連絡できた所とそれぞれに流通し始める。もし、こういうふうになれたら組織だとか権力なんていう言葉は思いつかないのではあるまいか。

同時代人社から『同時代人』が送られてきた。リベルテールが東京地方で発行されるように同時代人が青森で発行される。その手紙の中で地主さんは「地方で生活していると感覚、意識ともに、しだいに、この地に定着して行くのが感じられ、自己のコミューヌも辺境にすえられていくようです。」と書かれている。「青森はまだまだ深い雪」で、感覚、意識はその地方へとなじんでいく。リベルテールも東京のふんいきになじみ、東京地方の匂いを他の地方へと運ぶ。青森の匂い、東京の匂い。少し反抗を忘れすぎたかな。

『同時代人』は〝その十一月に〟〝越冬〟〝少女像〟〝やさしきナロードの歌々〟を載せた「詩誌めいた雑誌」

▼青森市花園町一の二の一九（地主方）

同時代人社　（定価二〇〇円）

緊急　ヤサカSOS　キャンプ変更のお知らせ

申し訳ありません。大変なことをひきおこしました。

3月9日、メンバーの不注意による火災で、プレハブ一棟を残して、共同体の母屋、新館を全焼しました。幸い山林への類焼、ケガ人などはありませんでしたが、衣類、寝具を始め、春からの農作業に必要な農具種など殆んどすべてを焼失してしまいました。共同体では、出火の原因、処理等の経過を徹底的に検討し、弥栄の運動に関わるすべての人々に対して自己批判するとともに、全力を上げて再建にとりかかります。

形あるものは、プレハブを残してすべて失ってしまいましたが、今、私たちに残されたもの、そして決して後退させてはならないものは、これまで三年間の弥栄の運動の成果である部落の人々との、あるいは野菜の供給を心待ちにしている広島の消費者の人々との間に築かれた関係だと考えます。また、運動の成果を創り出してきた、私たちが百人委と呼んでいる、弥栄の運動に関わるもの同士の関係は、焼けることなく残っています。

この状況を打開して行くため〝百人委員会の力を結集して〟弥栄之郷共同体救援委員会を発足させ、今後の再建活動を行なっていきたいと思います。弥栄は今必死です。

みなさんが、救援委員会のメンバーとして積極的にキャンプに、また都市での救援活動に参加されるよう呼びかけます。

一九七五・三・一〇

コミューン運動百人委員会

弥　栄　之　郷　共　同　体

★キャンプ参加にあたって

●前述のような状況ですので、最低一週間の参加と、寝袋・毛布・食器等の持参をお願いします。

●キャンプの内容は可能なかぎり、農作業・ミーティング等をおこないますが、住居も狭く、日用品も限られていますので、生活は肉体的にも精神的にもかなり苦しいものになると思います。もちろん、

そこは知恵を出し合って楽しくやっていきましょう。

●今後キャンプ関係の通信・連絡等は、救援実行委がおこないます。収容人員・調達品の運搬の都合で、キャンプ参加期間、あなたにできることなど早急に連絡して下さい。

●連絡先・大阪市東成区玉津郵便局留　コミュン百人委員会（振替　大阪94I5I）

●電話連絡は月～金9～12AM　06—76I—9295（出水又は大原）夜は　10：30以降06—745—7057（堀口方尾関迄）

●京阪神在住の方は、できる限り救援委の会合に参加するとともに、遠方の方も、大阪（四条畷こむうな塾）に寄って、事情を聞いてから行くようにして下さい。

★弥栄之郷共同体救援委員会の予定

《活動内容》

●救援物資の調達—　現在、裸同然です。ふとん・毛布・衣料品・食器・なべ・軍手・長ぐつ・雨具・電気製品etc　あらゆるものを必要としています。農具等焼失したものの購入、新しく家を手に入れるための資金等、約二百万程のお金が必要です。一口五百円で救援カンパを募ります。

●救援カンパ活動—

《三月の活動予定》

3・10～14　…　大阪周辺の物品調達

・14㈮夜　…　2tトラックで広島へ輸送

・18㈫　…救援実行委第一回会合　夜7：00～

四条畷こむうな塾

（こむうな塾へ来られる方は、事前に、右記連絡先までお知らせ下さい。道順等をお伝えします）

五・一メーデー共同情宣行動への呼びかけ

無政府主義者連盟関東地区準備会

我々無政府主義者連盟関東地区準備会は、此々に五・一メーデーにおける共同情宣行動を同志諸君に呼びかける。

アナボル論争時より現在に至るまで、アナキズムは本質的には深く労働運動にかかわっているはずのものであり、その戦いの初期においては圧倒的な強さを誇っていたのは周知の如くである。しかし全国自連（戦後の非暴力小市民平和主義・自由連合社とは区別せよ）分裂による衰退期以降の運動を一言でいってみれば、戦前のそれはサンディカリズム問題と革命運動弾圧を経ての崩壊であり、戦後のそれは日労会議を通じての総評への加担という日和見拡散現象であったといえる。戦後まもなく登場した総評に主導された大衆骨抜き路線は、あたかもそれのみが「労働運動」であるかのように見せかけ、逆に新左翼学生運動の影響をうけた新しがり屋集団は、同一の発想の裏返えしによって拒否しようとしている。

このような中で我がアナキズム陣営は、ややもすると自らの血に染められた伝統を全て忘却し、本来の労働運動と日和見メーデーを同一視することによって、見事に思想的裏切りを犯しているのではないだろうか。〝お祭りメーデー〟を拒否しながらも、それを黙認することで本来の「民衆的発露と暴動の基礎たるメーデー」の埋没を助長しているのが我々である。

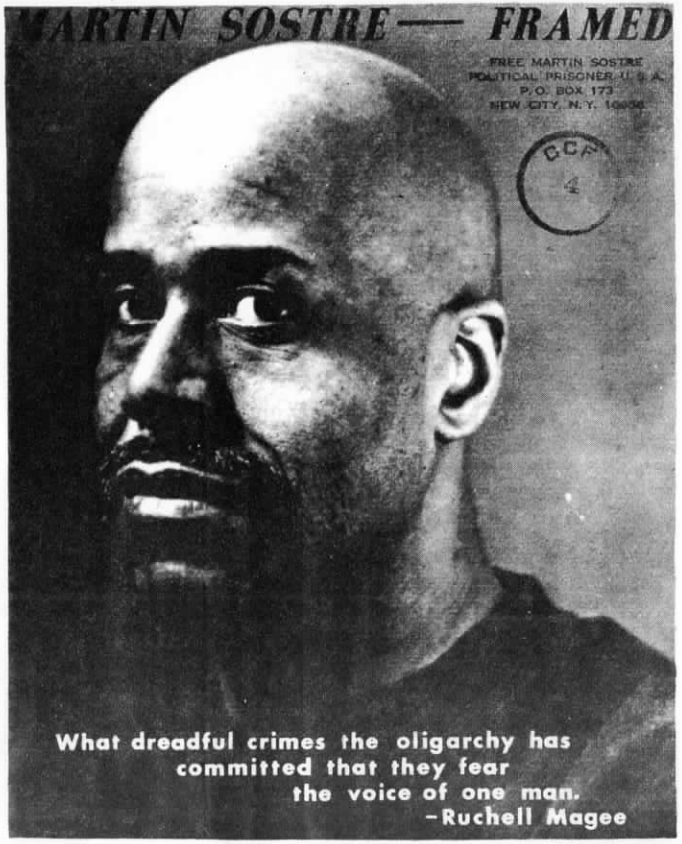
こうしたなかで数年来、十数名の同志は無政府主義を公然と掲げて情宣活動を行ってきた。それは力量の関係上統一メーデー会場付近での、去勢化された小市民層に対してのものでしかなかった。しかし「参加」するのではなく、戦後日和見主義労働運動or新左翼プランキスト集団＝労働運動という悪しき発想をアナキズムの側から打破する意図を内包していたのである。我々はこの活動の拡大として共同情宣行動を呼びかける。

無政府主義者及びその団体による統一ビラ（原稿併記による）を作成中ですので参加者は至急送付願います。

当日の参集場所は〈国電原宿駅神宮橋前側出口〉を出た横断橋上の黒旗を目印にして下さい。

連絡　東京都清瀬市梅園三ノ九ノ一　望月荘5号

関東地区準備会メーデー実行委



★マーチン・ソースターから手紙を受取った。「私は黒人のプエルトリコアナーキストで，人種差別に反対しているため，この抑圧的国家（米国）によって30年の刑期を７年半勤めあげました。また同房の囚人達と攻撃的な企てをしたとして別の裁判が用意されています。更に1972年以来24時間独房に閉じこめられ，拷問されました。つまり私の精神力を破壊しようとあらゆる非人間的処置に付されましたが，決して敗けはしません。同封記事は私に関するものですが日本の同志に実情を知らせて下さい。……」

ソースターの事件は1967年彼が暴動を指導したとして逮捕されたことから始まる。またこれが放免になると麻薬所持の罪で結局30年の刑に加算されたのだ。彼は不屈の戦いをロックフェラー知事に向け，囚人の待遇改善をつきつけ闘っている。支援は反戦ベトナムの闘士ベリガン神父，アムネスティ，マルティン・ソースター支援会更に誌紙ではフリーダム(英)フライプレス(独)スモーク(米)その他で行われている。支援して下さい。

Martin Sostre の刑務所
Clinton County Jail, Plattsburgh,
N. Y. 12901 U.S.A

★再び なぜアナルコ フェミニズムか

先週リベルテールの集りでたまたま入手した「女・エロス」という雑誌を回覧しました。反応はさまざまでした。中には公表をはばかるような発言を耳にしました。お互い現在のウーマンリブについては知識不足で、その上無知ときているからどうしようもありません。人は未知のものについて恐怖心から理性の働きを停止してそこに何があるかを探ろうともせずただ悪態をつくとか、遁げだすのは極く普通のことですが、事女性問題になるとニヤニヤ笑いか、微苦笑か、シタリ顔になるのはどうもウーマンリブの言い分に理があるようです。ズバリ言ってそれは男性の劣等感、社会通念に毒されて男性優位の立場からの軽侮か、領域侵犯に対する反撥なのでしょう。しかし考慮すべき発言を摘記すると……

1リブをやっているのはインテリ女性だ。田舎娘があれだけやるなら同意できる点もあるが、ドヤ街であんな事言ったらブンなぐられるだけだ。

2リブの建てまえと本音は違う。やってるのはバー勤めの女性のようなことか、自分より低い男性を飼育したりレスビアンである。

3リブについて発言するとピンクのヘルメットが迫っかけてくる。「お前の思想性を問う、方向性を示せ」とつめよられたらどう答えますか……等

1に就ては知性に対する偏見である。顔の美醜に対する偏見と共に女性が知的であってどうしていけないのか。非難されるべきは翻訳書に書かれたような言葉を操り、自己疎外した悪しき知識の羅列であって、ドヤ街の住人でも柔軟な心をもった知性からでる言葉は信じるし、仲間と認めて呉れるだろう。

2リブの建てまえは「女・エロス」の宣言によれば〈わたしたちは何ものにも規定されない女〉であり〈社会的規定性の自縛から、自らを解き放とうとする女は、すべて無産である。自らの労働に依って立たねばならない〉として望むものは〈あらゆる権力を排した社会である。真の意味でのどんな差別もない、自由で平等な社会である。女が女としてそのままに、男が男としてそのままにまたは自然は自然としてそのままに生きられる相互扶助の社会である。〉とすればこれは平塚らいてうのリベラルなフェミニスト運動から高群逸枝の〈強権社会から自治社会へ〉の婦人戦線を継承するものなのが判る。3思想性や方向性は自分でできめるものであって、私のそれは目下のところアナーキスト男性諸君の、女性に対する偏見を少くする方向にある

（文責・はしもと）

▼アナルコ・フェミニズム投稿〆切　四月二〇日

▼多少の遅延はこの際仕方ありません。よろしく

▼参考・『女・エロス』No.1

★編集室

★《われ反逆す、ゆえに、われら在り》こそ、われわれの精神的な連帯の合い言葉（スローガン）ではないかとおもう。個々人が何をきっかけに、現体制に対する批判・反抗・反逆の立場を形成したかは、さまざまであるだろう。だが、その個々の《きっかけ》の意義を堀り下げ、また、より普遍化してゆくことこそ、われわれの運動の発展を保証するものである。私個人について言えば、現教育体制、知識人の権威主義に対する反発こそ、その《きっかけ》だった。今後この問題を深めることを、私自身の課題にしたい　（江藤　敏和）

★自らの内からつき上げる胎動感が有るか!? 春はうららか冬の厳しさを春の温かさにとかしてしまう僕は今年の春もニヤニヤ笑いですませてしまうのだろうか。自己批判。（甲斐一）

★月刊はきつい！よい原稿が少いから…とまあつぶやいてみる。それは完全主義の悪弊なんだと答えよう。人はへどを吐くようにたたきつけて書くのもいれば、かいこが絹糸を吐いてまゆをつくるように自己の世界を構築する人もいる。ーああだから君はいつまでも一九世紀的人間なんだ。事大主義で鼻もちならない。結構じゃないかーいける所までいこう。ポストなんとかの思惑や傍観はしたい人にまかせよう。（莫空人）